

典辰家益後分扁

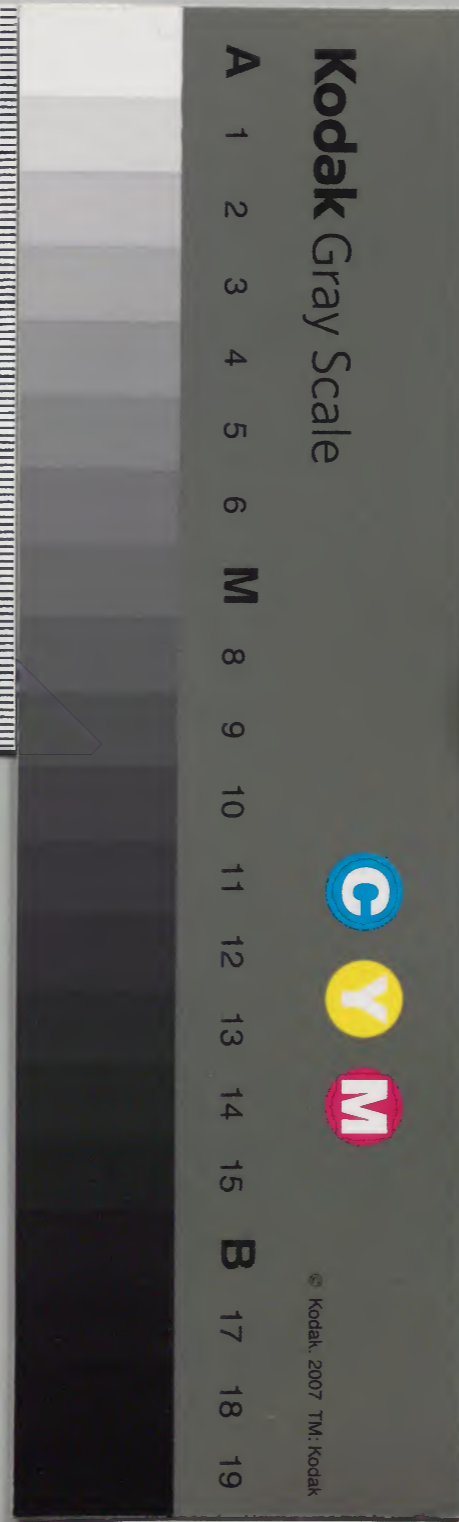
省務商農
書印圖
第 九
冊 五
共 七

庫文官政太
和 書 門
一 一 一
二 七 三
五 六 〇
冊 架 函 號

241
庫文閣內
和 書
一 二 三 〇
八 四 三 〇
函 架 冊 號

內閣文庫
番號 和 11430
冊數 2 (1)
函號 183 241

陸 産



大藏永常著

農家益後篇

全二冊

浪速書林

文金堂
芳山堂

青島市立圖書館

農家益後編序

夫種樹之業其利雖不及

種穀為之農家之業其利可廢

也左管仲富國之稱種樹

之利趙政虐民於存種樹

之書豈可算其益乎生民

皇清同治六年

矣大哉永常所其君之家
 是及海成百里商至之序
 亦余之閱之自先糧田之正法
 而迄糧實之進之苗之種接
 所漏于前編處不具載凡
 種種之利其益於乎此矣

先耕餘學種糧者再前海
 心管之其制是亦可精而必官
 伸中平之利其其之何難
 之有然其利雖不及種
 穀為之農家之云不可廢
 也余之跋于前編亦此編之

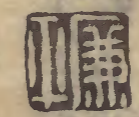
皇朝通志
 卷之五
 農家五
 卷之五

不可辭因年心此言云

文化庚午夏六月

栗園北荒井三盧書于

倭園五條王善館



農家益後篇序

江戸 龍山 藤堂良道撰

庚午之冬。有客在門。到自浪華。乃

通刺。余執而見之。姓大藏。名永世。字

孟純。號龜翁。曲豆後日田人也。當時寓

居在浪華。云余未聞其名。驚遽而出

迎。延之於蘭亭。而與坐。涉論終日。繼

晷以燭。孟純語曰。僕童外之年。於讀

龍山序 受和園藏

書而熟得師學焉。家父年之固戒
 曰。汝於學非不善也。然農者唯化樸質
 實而能脩稼穡之功。善良何必讀
 書而後為農焉。吾觀汝之好讀書。或
 失於尚而不甘其分。僅足瘞其產。所
 以為拒也。以吾此辭也。由能勿後也矣。
 僕性之所好。以教止。竊抱經問師。亦文
 又性。告曰。吾兒來。請莫顧矣。自是乃

後師亦不敢。僕歎曰。命哉。雖然。人生
 果夫。幾兮乎。古語云。君子疾沒世而名不
 稱焉。能是教。不徒讀聖人之正經。而知
 治國之權宜也。有能與犬子偕。尤与子
 本備。於是潛志於農。家之漸多。年
 矣。其至。所不通者。禮。謀。諸。老。農。圃。而
 業。以。詳。記。之。年。自。苦。試。而。后。著。以。農
 家。益。十。篇。其。文。極。鄙。陋。而。豈。不。足。可

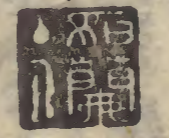
觀也。專庶幾。教者。農家小民。本非
 於伯也。君子之觀也。然文者。支離則子
 自背。刀刀混同。豈義我自困。豈一不琢
 哉。是以。每逢碩學鴻儒。則就而詰。正
 其誤。自。至碩學鴻儒。之。法。或為農家
 撰。私。之。書。捨。不。顧。矣。未。如。之。可。已。矣。
 僕。久。聞。君。善。成。人。之。美。焉。故。不。去。千里
 而。來。願。訂。心。焉。且。茲。言。焉。此。書。自。生。光。輝

也。若夫。是書。或得。行。於。郡國。而。少。有
 益。於。民事。則。輕。小人。之。僕。也。萬。一。通。奉
 報。國家。優。之恩。矣。於是。子。可。謂。僕
 矣。願。已。足。矣。余。聞。之。曰。善。哉。言。也。然。余
 不。文。固。不。能。使。有。光。輝。於是。書。也。况。余。家
 世。居。於。都會。生。於。於。耕。耘。種。樹。之。漸。矣。
 如。此。文。義。則。不。敢。加。點。空。胤。唯。每。篇。一。閱
 而。取。字。體。祇。謬。也。而。訂。心。焉。而已。是

龍山集 卷二 受和陽庵

書所心益世者乃諸友之言已矣
故不贅之余唯記孟化之為人寡
言內有大志所以非恒人之事
人云爾

文化七年丁酉在庚午十二月



農家益後篇 乾

熱論

大藏永常著

夫農業人間世第一の大事にして政事此
根本といふなり農を司る人五穀種を教へ
道に民を助る此を常と用ひたることは
貝原翁の書小見たり何國に農も出精
て益乃多う人幸我願はざるものなりは農
業以たすこれ余を考る小菓樹以て助け

志むる小まうはいたし 近世三都よりちりあふ
 梅挑林檎おははけりし 知して利潤多しとい
 えども遠國遠鄙に化押よと益あふべしと徒
 口腹をおまんごる面色ありあゝ又極端又便
 餐付蠟燭と製衣一夜を以て日よははれ大益
 ありて日敷あきて叶はざる益おたり住古の弊を措
 共さうのむけくを用ひ其業志然りて餐費毛を細めお
 行ハ松の火燈しありればはよを無ハはす小者廉の風俗

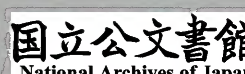
押梅りて奥山妻とも契紙莊の端燭火燈しわ
 已にぬ形は手も壺へ多く漬はりのまゝ六桃密柑
 あど同トうし且四季は撰らば貴後を修せ
 次餐付を法けざる俗人をく壺燭火燈さざるあは
 是れは~~...~~ てもぬはるまゝ是れ當時梅の大用たる事
 をまゝし 富より大益の晩成は理は漏れ昂時より利
 成るるまゝ 小民下化の農民はもとと眼前の利より
 て極毒本杯と終る乃雑説を法け適順を地はふ

植栽植をせらるるといへども等家より得て野圃
 の踏み踏おると又の村童に戯し苗根拔きとるるを
 且も其の根も具るる割を以て堂敷とすかれば凡
 植の能くして其の良圃を養ふに其の地野山に植て
 農人並列の乃助けよめる所は其の年貢あり田畑
 をんめく仕立て民のあまよま付とつゝたることをし
 かるるは其の新規に企てりていへども其の
 經濟の格別の福よして國の強し國產の富

くの地の利を奪す及理めて仕来よ流む節よそ
 へ有るるをさへ一夫土地よ變易あり論へ指扱出
 て扱箸よとるり踏車あて執骨車捨たり是を
 を考(昔)と今との世に此を以て國よ益ある
 変を計るべし柿園の效用の土地と民力との二ツは
 根本と比るより出所あるのあり土地は大小民力
 の多し少しは其の效用の生るるも限りありなり
 效用の法は其の法に依りて其の制は其の法に依りて

縁わ人へ年生民の力食てたふともよ生涯を
安んぶる事あるは徳よんさふり此有るは徳を民窮
する時士の死ありともいふ農を助はるを
よし民死後して民思死報はるるは報は
と云ふ此化の分限を斗り其折れ土地よ意
しよはけいらざる菓樹を植りよまてはかうべし然
中極生端の何れ一時よ大坂へ津志りとも價の
高下へちちびかたりの子とて捌はるふれをばな

まへ尚時け極よまふりよのあはは花よそへ端を
仲間三十軒あり各を形よて手申ぬ金何万
の番ひまらりよと我さも有るはまら日本のうち
元七八歩通へ極成ゆるる園まよ六其何へ皆大
坂より積送るりよ其か晒蟻屋よ十軒極成積
て生蟻よ縁を流り屋よ格勢中買百軒荷者同
屋と唱ら仲る三十軒廻者同屋と号る仲る三十軒
有りて唐物よ積りて大いなるあひさのりはして



廣大のりて形廣く其の代亦已に久しきなり
 且於て常々其香よむむとて極く毒木おと得る
 へ何れを也茲に郡村の蓋となりし事以て三
 べし豊後の國日田郡は川内村といふも小村ありを
 村は名友半花といふ人元々十年を要極へて村を
 助の蓋樹ありて植べしと小治の若衆へ後合せ
 らしよとて一系必知せざりしを後年此宜し
 之をり安せおとて元此野山或は山畑井除の西
 之をり安せおとて元此野山或は山畑井除の西

植て植て木取瓜系別は割付手介入りお自身
 之の如くせしとて一が僅十年のみたざる肉村
 介用を毎十七八年且して惣村御年貢は半
 極其は豊得てははくのひたるとるが又ありの
 且も是れお徳りせしとて一と安ぬいことり魏の西
 約早魁且ち一むおありはとては水を引く十
 の小川を掘穿ちては代助けをえんとするは氏大
 且田地ははゆるは煩苦せしとて西門約

京由

豊家益 徳篇

朝五 愛和園備

かりらく川を穿つうがの費たへとづうよして不ふ怨げんして
 諸列しよれつの夢ゆめをりへたいたりとそはひ且また其その川がわを茶
 然しかして百ひゃく歳さい此この後のち其その徳とくを更にたんんと
 かん又また同どう郡ぐん山さん田でん村むらと云ふ小せう村むらあり吾われ我がといえ農のう
 事ことよんん沢たく用りる老らう農のうあり享きやう保ぽ七しち年ねん此この比ひ紀き前ぜん
 の玉たまはは徳とくて徳のし立た換かを徳やう沢たくあり苗めう成せい未みぬぬ来き
 又また下げ畑はた且また植うへを村むらの人ひと追おも笑たりよい人也なり
 とかまつびぬぬぬへの由よし育そりが追おもも終しゆう成せい

実じつもありてかしは此この得とくを見る比
 山陽さんやう南なん海かい西せい海かい蝗しやう付つて大だいおし川がわ僅げん志しをこへの時とき
 笑わらひし人ひと々々も亦故こ控かて法國こくよさまましし喰くを乞
 たりしとかん其その年ねんへ徳を至て実登とりしと穀十じゆう斤びん
 をとりて是この故こ賣う其その價あひを以て米ようんん川がわ僅げん成せい
 せぬれより殊またよ徳へ窮民びんを助けたる事あり
 る感徳たんトき人ひとのおおとともゆはらぬに友とも督とくけ
 減くなりしと徳成せい控かる程此この實じつをして徳成せい仕したり

豊家益 後篇

先代 殺四園蔵

事ども城州移とか一窮民夜光此玉と号子
 常は懐らまらり又九州或國よ八國より極成
 極下と一國傾肉へ後後さま丘松山杯を伐りく
 うまらまらまらうまらまらまらへ極本はまらまらまら
 実成のありまら極成たりしが元より雌本雄本此
 分別をまらまらまら実小さく肉成くして仕立ま
 川たずして利をたれりのことて伐採て既止ま
 んとせし且接まら利方ある事成仕立たり者

有て有極極の大実成成たる極と極成極成り
 肉原成を極成其極成極成極成極成極成極成
 と遠い盛長もまら一本も実生まらまらまら
 利分大且んくまら八國中再い極成極成極成極成
 中此城城極成極成田産まら極成極成極成極成極成
 より清質とまらまら大極積成極成極成極成極成
 五年の賣り元五千貫同條宛有より一子家
 或へ生城まら七十八万斤は毎家極成極成極成

龍藏益 後篇 朝ハ 松園藏

後一うゆふとのお篇よりなつりた乃益
ある後を後凡若ん世書をんては通し乃益を
其城をぬき速し成就すべしけたい若ん如の小苗
の接する昔より極成なる國もあつてさうさう
種族家極秘と伝ふるあるまじきもの余秘する事成よ
ろそん國画をぬてはまじきうに述するらん人原
極文城ゆるして其意成とらんちまのく結圖は終
を妻基ちらんうー

極を極て換益ある此兵

極成極て國益を譯うんとあらべ接本と云美若
ありの不接本との差別を各ふべし論へば松山乃
大実城尋求して時付たりともしみ六歩通ハ男本
有べし男本且女実あるは女本且女実あるはけり別
く極付て於今年も実生うさむは信よふ介して地と
人かして成はハす事あり又ハ女本多く出来て実を
あるても実あるの終してハ本振象終よして枝上へのび

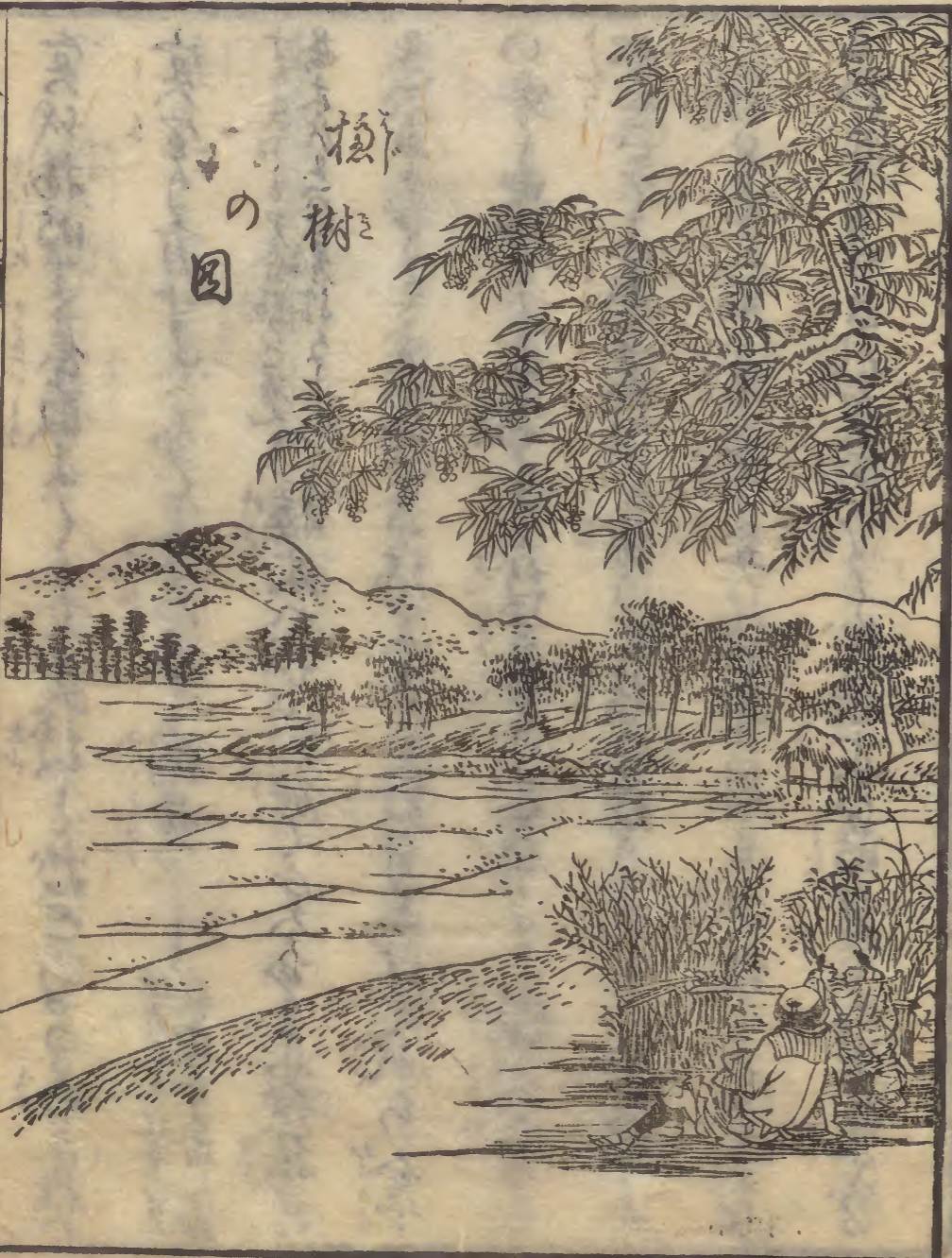
龍藏益 後篇 朝ハ 松園藏

農家益後篇



草履
受和
田積

農家益後篇



樹の図

乾竹
穀口
田積

實成挿時よ甚取よくし又枝し枝どのるをたれ
 實成の方すくなくにたを肉為し
はか本男木の見
分扱考の篇に因
すんといへども又分扱は者
接本はよははを分るし ○接本は松山の能く實成り本成接と
 之を本すも實成りさ海本なく枝付まげく秋ら傘
 の如く四方しもあま枝葉り本振よく蟻肉をく
 仁小くく實もまげく生りて接し便りよし ○不接本
 へ時付て二年苗床よせれ四年目よ本植して夫を
 口五年もせざれど實成りし接本へ時付て三年に為る

本成樹本よして能く實成り松山本は接成接成
 なるに植付て其年より實成り本成りとも兩年程
 と摘捨三年目より種をぐ接して實成り本成り
 へ本成り八九寸を尺早りよ至り四年よりへ過く實の
 價も納り十年目よ本成り本成り浪式に接目も生る本
 出本成り
平均して九分を接てなるべし
たよふつし
又その千中よそは接成り目へあつたり かくの如く不
 接本と交換益は本成り一けり成り本成り接本を植
 利本柿の菓も接本は實大成りて多

實生方ふゆ

梅山成家人と思ふ心得の事

先梅成植て子孫此家習ともしあはべいと考へる苗

代子の費ハ捨テ年捨の目して取らるべしと考へ

ハたと接木成植よりとも接目より風刺植植杯

を考てふか此梅成全仕立人と考へ介と六百かも

先操且植へ有るもの○を方、植土地を求む

其所よりよくと活せる人をくべと考へと小人成樹や

梅一を考るとバニ百年の乃以屋さぶるりの後ら

夫を以てアも多しいらぬりのふして十ヶ年其も

なるとも去一梅人根を和らげ起し成入たる條り

めて宜しを毎度木の根を秋と和らげられ

左其候ても不苦○梅成植んと考へ三人十年此候

ハ樹成植るふありと云確言を考へ急不利成得

其のふあはじと云心得るごとく之を年目ふか退屋

考て存の外扱へあり既よ穿捨て止しといえるかお

ありの之三年目秋迄辛抱しぬれば大塚安堵は
 るとれなりと云ふべし。○抱入の多は三年目を以
 ちて已む年目の八十又よたふべし。○梅成植て塙
 又強り他國出へ金銀を國より取入より象他
 免ら國の塙へ往程漬し何程此銀目を是成
 年と他へ出たと云ふ成斗り見ふべし。以銀を化玉
 〔書契〕と云ふは時へ其價玉の助けたるはこれ
 梅成植ては防は成始とて人々へ永く其國の富を

後人かんとし候し國郡の事より速く成
 げとるべし。度人此刀を及ぶべし。○是迄諸國小
 梅成植弘免し事成安及ぶし物へ御下農家毎
 又觸せらるは種子成液し苗を法前付有て持
 し本教を割液しせさせらるしとて且へ仕列ぬる故
 多入木も亦捨其なりめて止めぬる再び御を信
 らせしは度へ梅成切者たる者をも出さる上段人
 法掛り有て前端よ云やく苗木を播度め丘山

農家益 後篇 卷之五 受和園藏

を家元空地堤井路の直智採(湯)植立より六七年よ
 もありしうば實此便も元其蓋のがあるうぶ体を見
 及びおのこどと追々植立まりしに公私不持の蓋と
 ありぬ國よ移進人となるが是よりあるひて丘山に城下よ
 ちり往來より往々見ゆり前城をす所見立元元々
 植立其御城下をすお利よ移進する植立城をす
 移進附み密し日用此のよして荒山畑元元元元
 植立六村の御となり川崖此を南おもるるぶしとい

えり車城解あせせ並れをす未知なるりのも植と云
 り成りなるを氣を付て見及べし一國よ移進の時
 此に御掛りの役人の思ふ宜し御奉行た元元人
 樹木よ喬しううささか成然とすし余役員帯しよて
 入り坐うするりのなり

苗仕立場之車

植苗仕立場新風の強うさる風すれうさ日苗りよ
 く地味おむらうはさかきよく基石まらり此水の子

農家編
後編
九十五
穀和園載



苗仕立
場の
図

○四方八丈の
くさば
やう地
まー

よく湿地なうさば土田に播ひ仕立へ田の播き
く八百早焼せざる肥良の畑よすべ

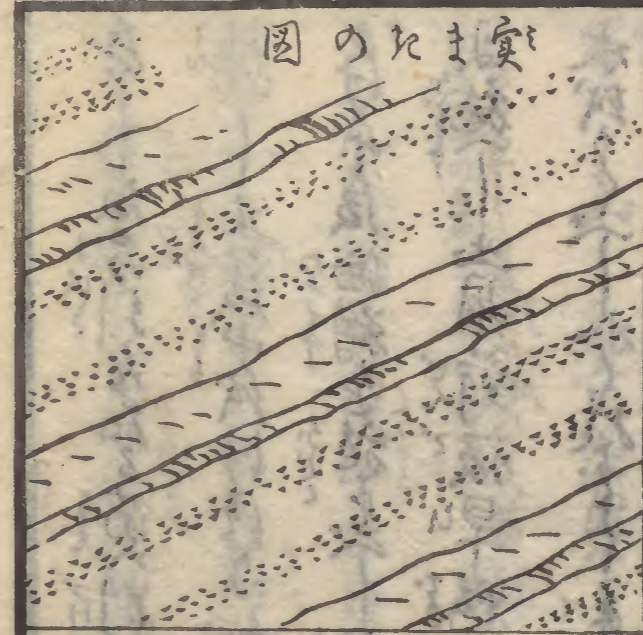
臺木よぬぬに蒔苗仕立候

実蒔の事ハ先篇より述ぶ見人今一其
おちりく下家より家よ著り○たよ播木此臺木
なるはそ由紀花道其外より知方実の少は蒔へん
松山れ実の上実を播ひ蒔へ成長大いよよく播木
して後をせるとさうくすこやうり○種子を水よ浸し

農家編
後編
九十五
穀和園載

久前篇よりして見ると一喜の被居およぼし
 三月末より四月末までおこなれたる時ハゆる湯
 浸し一畝五升ほど日ごとくお出し温れハ種子の只少
 実れりべし其時時として
前篇より園は中へ畝二面ハ種仕
 換をせりやその愛園は如くあり
 五月十日程より人糞又ハ
よき方五一〇苗床味のより苗
 仕立揚の糸より見合極へし 肥し
 六月十日程より人糞又ハ
 七月十日程より人糞又ハ
 八月十日程より人糞又ハ
 九月十日程より人糞又ハ
 十月十日程より人糞又ハ
 十一月十日程より人糞又ハ
 十二月十日程より人糞又ハ

一畝五升ほど日ごとくお出し温れハ種子の只少
 実れりべし其時時として
 五月十日程より人糞又ハ
 六月十日程より人糞又ハ
 七月十日程より人糞又ハ
 八月十日程より人糞又ハ
 九月十日程より人糞又ハ
 十月十日程より人糞又ハ
 十一月十日程より人糞又ハ
 十二月十日程より人糞又ハ



多せ多くわく共かくしをまの植上よ古儀やれおの
 ををいひ園へト是の其又々其まう立置時六等風を志
 ちよ中りて括かたなるの
 前なるも一は一をまかく合
 成長させたる苗も六等風の中は



圃の如く圃たるをまはば
 ちて苗床と初年れごとく
 二乃五の目み極へ一
 十日後さて凡る
 日積見合極し

如く竹多成能く中成をくり夏土用ふとよそ二年此
通り犯しを施べし土用ふて犯しすまふべし
其年の
物年へ移りて別は開くがな秋迄いもろし
冬より中成をくり用べし
其二年おと云物三年目の春迄
持来此春本ぬ友別は極ゆるり



二年目
の苗を年
八月ころ
の図

○二年目の夏接来此春本ぬ法りちうおろ
すまし接事を得たり文画よてもおしえが
れよして家よる暇せり予が宅よは出わが紙
ぬたうくともおしえ進べし
向傳紙は後紙
備も信不申也

接苗早仕立之傳

ちうころぶ 豊前
を此豊前の國中津の立原井村とつるよ橋を多
植立大実此苗成接広む其後成る公らと号し松の
実よりもちろく生り方務より是豊後國川内村よ生

農家益 徳篇 輯十 愛和園藏

またる實を原井村の寺に任僧に奉り七度接したる
田小園を多く仁少くぬたるより
又豊後佐伯なる園谷氏大實の接法接出する事
史ぬ是等れ苗ありび小松山正法を九州より九
接本の本立小すべし其来先種並に其夏に接本は種
小如く種取あり七八廿少く是は種悉く接する
時たると百本の本ありは百本に接本其秋は
来るより接法は西園にて苗は仕立る園も知るごとく

て多く中本は倒一枝を挿め接本友接目より接目
より苗本種して接本多しなるをば接法の法は三
年と云ふなりしよりしてまゝに接本法活法と云ふ
甲は接法は活法と云ふ事多し一園に接法は
つるといふゆゑ未熟よりして百よ二の付ざる接
法の方あり接法は梨柿の接法の如く心得
早合点たるが夜は其樹より年々見之守り
接本本本れ種方三法あり是より接

農家益 後篇 九十九 愛和園藏

右の園は苗の先後の園は春夏は接なる本伐を秋
 又の翌年此本伐は五号一苗のみして右の云如く春
 植へば一より今も六其夏は枝殺多し一より其
 三尺延出し其穂先を悉く接れて殺すは為の仕法
 を右の園にて述ぶ

○右の園は上は細字記して記せり又その
 石に本文如く記せり大少とも然るに
 まごも六其術の首尾どうりごとく

横たかへば此園
 右園の如く植たる本伐の
 土用おむや成る各園の如
 接よたかへば本の元より中
 径と土をさそるは下
 ○本本と穂先をたひ免
 其節すし成めて候へば
 〇接およ本本の土を切捨
 べし接て後切捨てもし
 上よ命を接はさるまに
 へり月やへりさるまに
 へり



鳥家益前編

享和二年

右接たる本紙再び
圖して其妻の紙
あつてむ

○いしとして接せば十
二八九の符ふらうと云ふ

○夏の接紙の紙あつては
夏接紙の紙あつては

口一

○夏はだの時にだれに
あつては

△右接木の図の画人その
筆をえびてて図した
るもよみ本れみ未似る
ところあつて只その解
とる紙あつては



夏の接紙の
いしと云ふ

鳥家益前編 三冊

享和二年
出版

文化八末年

仲夏

京都書林

江戸書林

大阪書林

堀川子辻上

日本橋一丁目

須原屋茂吉

心齋橋からこの町南へ

河内屋 右助

雛屋 可

播磨屋 松之助

鳥家益前編

享和二年

農家年位
身和園

大町書林
京林書林
天正八年
農家年位
身和園



苗床
の
園

農家年位
身和園

接木は人心得の奇

こかく 極付て此三千年 古本小書も古本をす 以て實に肉厚くはやく成る
 伐て接うゆより前篇より古本の接後あり 在中本極付て九百年の實を
 らざる本伐伐て接し接しつて十二三も付り難し
 其故いふに五六本は下の皮厚く及ぶなり此接
 以後拾ふ中本小本此接を拾も同じやう小力を以て
 本此接をを拾たり 然中大本は皮厚く且拾口の幅
 廣し小本の皮厚く拾幅せむし
大小とも本此接接せり
 八三前篇に見る如し下

此も接穂の大小を同じ位なるは拾口はおしむ
 ぶよ大本と志の介りもさすとも小本の拾口は接穂

を交うて用うなり切ると故に百本は指本の付ぬも
 のありとさるべし ○ 浪花橋本先生の門は接木で

蘭書は素綴紙をとり且解體は車坂空羽るよ
 窮理したるはつり夫人間よ動脈血脉水脈神経号

此液路わり州本の葉未よある近中液路有て液の通
 ずり人百廿四は夜よ差本此液路と接穂は液路

南政直
内庫

清印

其後ひかん乃すなは十六日じゅうろくにちももてて免りふや芽えのか極きょく是こゝれをとと究ひ
 んとはは時ときよよ芽え又またよよ夏なつ接つぎのどくくてて接つぎてて先ま春はる接つぎ
 のち夏なつ接つぎよりより内うちれれととくく接つぎよりより一ひとつつ
 ○まよよもも云い如ごとくく夏なつ本もとかか出いるる身み身みああくくかか死し捨すてて折せ角かく
 接つぎつつ回まわりりもも芽え分ぶん減へつつささもも接つぎ穂ほ指さしてして冷ひやまますす
 ○春接つぎもも夏なつ接つぎもも秋あき切きるる久く下げへへ云い本もと極きょくせせんんとと
 時とき切きるる久く下げへへ

農家益後篇乾巻終

